ける喉頭像の観察, 内喉頭筋の筋電図学的検査を施行し, ヒステリー性発声障害時の声帯像と内喉頭筋機能との関係を追究し, 興味ある新知見を得たので報告した. すなわち, ヒステリー発作時には, 声帯像と内喉頭筋機能とは完全には一致せず, 内喉頭筋は呼吸の時期, 発声に無関係に筋活動が持続し, しかも一定の筋トーンスを維持している.

主 要 文 献

- 1) 古谷誠:「エディプス」複合に関する研究, 広大医誌 10, 132~138. 1962.
広医 13, 255~346, 1960.
- 2) 高畑長吉: 心因性症候撰撰に関する研究, 3, 植松七九郎: 精神医学 265~289, 1957.

口 蓋 脂 肪 腫 の 一 例

加 藤 純 彦・田 村 直 民・森 川 道 也*

A Case of a Palatine Lipoma

S. Kato, N. Tamura & M. Morikawa

Department of Otorhinolaryngology, University of Tokushima, School of Medicine.

(Director: Prof. Dr. G. Schirakawa)

1. The patient was a two year-old girl. This Tumor was a polypoid lipoma which was attached to the uvula with a stalk, and was removed easily by a snare.
2. The tumor had its base attached to the base of the uvula and its head was in the hypopharynx. It appeared into the oral cavity only with coughing. There was no accompanying symptom.
3. The lipoma arising at the base of the uvula is rare and had not been reported in Japan.

(Author)

緒 言

口腔およびその周辺は人体のうちでも腫瘍が発生し易く, また現われる腫瘍の種類がもつとも多い部分とされている.

この口腔のうちで口蓋に発生した非歯系良性腫瘍の報告例は種々あるが, 本症例の如きポリープ様脂肪腫の報告例は殆んど認められていないように思われるので此所に報告して参考に供し度い.

症 例

患 者: 2才, 男

主 訴: 咳嗽と共に口腔内に腫瘍が飛び出して来る.

家族歴: 特記すべきものはない.

既往歴: 生来健康で著患を知らない.

現病歴: 生後9ヵ月頃より咽頭に小指頭大の腫瘍が認められるようになった. しかしこの腫瘍は咳嗽等の

時に口腔に出現する. その後唯, 啼泣するとき息がとぎれるようなことはあつたが特に異常は認められなかつた. 今朝咳嗽と共に口腔内に拇指頭大の腫瘍が飛び出して来た. 以後後食慾は減退している.

現症: 全身所見は体格栄養共に正常, 脈搏整, 緊張良好, 肺心其の他内臓諸器管に異常を認めず, 頸部リンパ腺の腫脹もみられない. Wa-R(-)であり, 血液

* 徳島大学医学部耳鼻咽喉科教室 (主任 白川教授)

第1図

口腔内撮影（腫瘍摘出前）

第2図

口腔内撮影（腫瘍摘出後）

像は赤血球495×104, 白血球7600, 白血球分核に異常所見なく, 尿中蛋白, 糖は共に陰性であった。

局所々見: 開口させると口蓋垂の左側基部より大人拇指大の有茎性ポリープがみられ, 啼泣すると呼吸につれ振子様に口腔と咽頭間を移動する。閉口させると門歯より前に腫瘍先端が出ている。表面は滑, 色は普通咽頭粘膜と同色で, 表面には小血管が見られる。

処置および経過

この腫瘍を穿刺したが内容は得られなかった。開口器で開口させ腫瘍の茎部にコカイン塗布後腫瘍茎部に太い絹糸を2本かけ結紮切断した。術後出血, 疼痛な

く食欲も極めて旺盛となり, 経過は極めてよく, 7日目に治癒退院した。

剔出標本

長さ約4.5cm, 尖端直径約2.0cm, 茎部直径約0.5cm, 重量約6.0gで頭部は楕円球状, 茎部細く弾力性軟, 表面平滑, 色は普通口蓋粘膜と変りなく, 小血管の走行がみられる。

組織学的所見: 表面は一般口蓋と同じく重層扁平上皮であり, 上皮下には筋線維の走行をみ, 内部は成熟し切った脂肪組織の他に脂肪滴の小さい脂肪芽細胞を混じりその間には粗鬆なる結合組織がみられる。

第3図

摘出腫瘍

第4図

組織標本 (H. E. 染色×100)

考

口蓋に発生する良性腫瘍の報告例をみるに線維腫, 骨腫, 血管腫, 乳嚢腫, 口蓋内皮腫などがあるが, 本邦には未だ本症例の如き巨大なる口蓋脂肪腫の報告例はみられない。

一般に有茎性良性腫瘍を臨床的にポリープと診断す

按

るのであるが, ここで咽頭ポリープの報告例を2, 3検討してみるに Hand Flecke は43例中脂肪腫19例, 線維腫19例を羽田野は42例中脂肪腫14例, 線維腫9例, 脂肪線維腫7例, 血管腫3例, 癌腫3例, 単にポリープと記載せるもの4例, 乳嚢腫, 奇型腫各1例を報告,

さらに本杉は14例中脂肪腫2例、線維腫3例、乳嘴腫5例、血管腫1例、振子様扁桃1例を報告しているが、今迄の多くの報告例を検討するに本邦においては欧米に比して脂肪腫の報告例は少ないといわれていたが、それでもなお発生頻度は相当に高いようである。このように咽頭における脂肪腫ポリープは相当数みられるが、本症例の如く口蓋に発生部位を持つポリープ様脂肪腫は稀有と思われる。

この周辺のポリープの形態は細長のものが多く、長さものは15cmに達するものもみられる。一般にポリープは自覚症状が軽いので長期間設置されていることが多く咽頭を一杯にふさぐように大きいものや、食道に迄侵入した報告例もみられる。

本症例は口蓋垂に茎の附着部をもち乍ら咽頭（恐らく上咽頭）にポリープがかん入し、長らく無症状に経過し咳嗽と共に口中に飛び出して来た例であろう。

この近辺にあるポリープの治療については茎部より切断すれば容易に除去されるが充分に除去しないと再発の恐れがあるようである。本症例においては充分に除去可能の位置にあつたので術後6ヵ月になるが経過はよく現在再発の徴候は認められない。

終りに本腫瘍の発生原因を検討したが、施行せる諸検査に異常を認め得ず一般腫瘍の発生原因が未解決の現在、これを解明することは困難であると考えられる。

結 語

1. 本例は2才女子の口蓋垂より発生したポリープ様脂肪腫で冷締系をもつて容易に切除しえた症例である。

2. 本腫瘍は茎附着部を口蓋垂基部に持ち、長期咽頭にかん入、無症状に経過、咳嗽と共に口中に飛出して来た症例である。

3. 本症は極めて稀有に口蓋垂基部に発生したもので、本邦においては未だこの報告をみない。

（擲筆に当り御懇篤なる御指導と御校閲を賜わつた恩師白川教授に対し、深甚なる感謝の意を表します。なお研究にあつたてえず御教示、御援助を賜わつた本耳鼻咽喉科教室の諸兄に厚く御礼申し上げます。）

なお、本論文の要旨は昭和37年5月27日第26回日本耳鼻咽喉科学会四国地方会において発表した。

主 要 文 献

1) 尾形：耳鼻咽喉科 12, 98, 1940.	7) 今川：日本耳鼻咽喉科全書 3, 237, 金原出版 1953.
2) 小山田：鹿児島医誌, 20, 6, 1943.	8) 西川：日耳鼻 52, 5, 1952.
3) 伊達：耳鼻咽喉科 16, 2, 1944.	9) 宮田：日耳鼻 62, 313, 1962.
4) 宮地：十全会雑誌 51, 3, 1948.	10) 岩田：日耳鼻 62, 2529, 1962.
5) 石倉：日耳鼻 49, 8, 722, 1949.	
6) 応神：耳鼻臨 43, 273, 1950.	